

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520338

研究課題名(和文)ドイツ近現代文学における「聖書詩学」の系譜

研究課題名(英文)The development of the "Biblical poetics" in the German modern literature

## 研究代表者

川中子 義勝 (KAWANAGO, Yoshikatsu)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：60145274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ近現代文学の展開を「聖書詩学」の系譜として辿った。その際に、修辞学の観点から「予型論」的な比喻形象、即ち時代を越えた形象の呼応に注目し、同じ形象の発現を通時的に辿る形で跡づけていった。比喻形相の呼応は、作家・詩人の目的論的な意識(本研究はこれを「神義論的思考」と名付けた)によって導かれるが、「世俗化された」現代の宗教批判においても、生の意味の追求として同じ意識が働いている。本研究では、知識社会学を援用し、そのような意識が生まれて形作られる過程を「詩的主体」の確立として系譜的に跡づけた。その際、文体論的に作品の語り手人称に注目し、「詩的『私』」の発語形成として追求した。

研究成果の概要(英文)：In this research I made efforts to trace the German modern literature as the development of "the Biblical poetics". From the view of the rhetoric I gave attention to the "typological" figure in the texts, and found a series of correspondences of the figures in different periods. It is the teleological thought of the authors (in this research I call it "Theodizee-thought"), that organize the correspondences of the figures in the historical development of the literature. These correspondences can be found also in the secularized modern age, and even in the critical texts against the religion. With the help of the sociology of knowledge I intended to draw the origin and the process of the "typological" thought in the birth and growth of the "poetic subject", that see the reality teleological. For this purpose I studied the function of the narrator of poems, especially of the "first person" of the style of writing (lyrisches Ich).

研究分野：人文学

キーワード：聖書詩学 予型論 神義論 詩的主体 形象 讃美歌 コラール

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 私の研究は、啓蒙の問題が「宗教」対「世俗化」という通りやすい対立の図式では表し得ないことを明らかにすることから出発した。宗教に矛先を向ける批判・否定においても、その修辞においては宗教的伝統に深く根ざしており、容易に覆されないものが言葉自体の中に受け継がれている。各時代の文芸思潮の展開に比べると地味だが、実はその変遷を下支えしつつ、伝統の中に脈々と培われ、時を得て回帰する（聖書に起源を持つような）言葉、すなわちその「予型論」的構造にこそ注目する必要があることを指摘した。

宗教的伝統に深く根ざした個々の予型像・比喩形象は、ヨーロッパ文学全体の淵源に遡る系譜を形成するとともに、各時代の言説に深く浸透している。しかし「予型論」は今日まだ神学や聖書学の関心にとどまっておらず、アウエルバハなどの一部の例外を除いて、文学研究がこれを顧みることが少なかった。アウエルバハは、この問題を「フィグーラ論」として展開したが、その成果は中世ヨーロッパ・ラテン語系文学の枠内にとどまり、近代文学の問題に積極的に関わらせられてはこなかった。宗教改革という断絶を経たドイツ近代文学に関して、それは一見妥当のように見えるが、修辞の伝統はそのような断絶をも越えるのであり、その点を指摘し、その系譜を跡づけることを、私の研究はまず志した。

(2) 以上の研究を進め、近代初期から現代に近い時代へと辿るにつれて、なお踏まえておくべき問題を認識するに至った。この研究を、さらに世俗化が進展し、宗教がいつそう希薄となったように見える現代にいかにか接続させたらよいかという問いである。この問題を、平成20年度より23年度まで、文部省科学研究費補助金基盤研究(C)を得て追求した(研究課題名「ドイツ近現代文学における『神義論的思考』の変遷」)。「予型論」は歴史や時代を越えた比喩形象の呼応を述べるものであるから、広い意味での「目的論的思考」を反映する。この点に着目し、比喩形象を展開する修辞的・文体的営為に認めうる、作品を統括する目的論的意識を「神義論的思考」と名指した。「神義論」とは本来、自然の現象や歴史の展開に神が関わる仕方を問う伝統的な問の様式である。悪や禍を恵みの神の表象と如何に結びうるか。その問いは「この世界には意味があるか」というより一般的な問いに換言することができる。神義論とは即ち、世界を一義的に意味付ける妥当性への問なのである。だが、そのような「意味への問」は、宗教を批判する現代の文献をも貫いてい

る。ギュンター・グラスの『ブリキの太鼓』なども、キリスト教的な語法や比喩形象を、専ら宗教の無力を叙述する為に敢えて多用する。そのような否定を経た新たな神話形成、詩人の立場からする世界の再神話化は、「意味の問い」を巡った一義性を固執する点では信仰篤い宗教言説と実は同一の修辞構造に基づき、「裏返された神義論」とも呼びうる。すなわち修辞の観点から見る時、現代文学の多くは「神義論」の反転過程と位置づけられる。本研究に先立って、このような鏡像・倒立像をも含めた意味での「神義論的思考」の観点から近現代の言語作品全般を見渡し、跡づけてきた。以上の手順を踏むことによって、ドイツ近現代文学を宗教的修辞という視点から俯瞰し秩序づける基盤が整った。

## 2. 研究の目的

本研究においては、以上のような経過やこれまでの成果に基づいて、修辞論の視点からドイツ近現代文学を包括的に見直すことを新たな目的として据えた。すなわち、(a)「予型論的比喩形象」と(b)「神義論的思考」、言い換えれば、(a)修辞論の伝統から事柄を言語内在的に捉える把握と、(b)叙述の営為を(世界観を超えた)目的論的思考と捉える視点とを対峙させることによって、ドイツ近現代文学をその出発点からもう一度跡づけることを本研究は新たな課題とし、追求した。その端緒として、本研究を方向づける意図をもって、『詩人イエス ドイツ文学から見た聖書詩学・序説』をまず刊行した(2010年)。そこに提出した「聖書詩学」の視点からドイツ近現代文学を系譜的に叙述することを、本研究は最終的な目的として据えた。これを達成する為に、この段階で追求しておかねばならぬ課題を具体的に次のように定めた。

これまで私は上述のように、複数の予型像や比喩形象の修辞的脈絡を言説内在的に提示しつつその系譜を辿り、さらに宗教批判の言説が氾濫する時代に至っても、表向きの対立を越えた隠れた伝統が、個々の形象のみならず、形象を操作する意図にも及ぶことを指摘した。しかし、「神義論的思考」のような作品全体を左右する意図を押さえた上でも、修辞という言語の身体を統御し作品を産み出す個としての主体がなぜ形成されるのか、これを各時代の文脈において歴史的に位置づけたとはまだいえない。「聖書詩学」を系譜的に叙述する為には、そのような秩序付けが不可欠である。宗教的修辞の展開と叙述の目的論的意識という両主題の交錯する焦点に、新たに、歴史的現実に対する「詩的(文学的)主体」の姿を明示する課題が立ち上が

ってくる。本研究は「予型論」の系譜と「神義論」の変遷というこれまでの縦軸・横軸に対して、知識社会学を援用しつつ「詩的主体の形成」を新たに第三の軸として加え、「聖書詩学」の立体化を目指した。知識社会学を用いたのは、本研究が詩人・作家中心に文学史を辿る従来の傾向とは異なる観点からの追求を志向する為であった。ただし、本研究はあくまでも言語内在的な研究に固執し、「詩的主体の形成」という問題を、その発現としての「詩的人称」の秩序付けという構想のもとに考察しようとした。

### 3. 研究の方法

(1) 本研究は「詩的主体の形成」という新たな軸をたて、「聖書詩学」の系譜を立体的に描こうとしたが、それは、従来の文学史理解の枠組みを批判的に検討し、問題性を指摘しつつ、新たな枠組みを提起することを意味した。知識社会的視点から比喩形象を脈絡付けていく為には、詩歌等の作品や文学テキストの分析だけでは不十分で、本来それらが組み込まれていたテキストなど、理解のために不可欠な言語的文脈・社会的環境をも視野に収めなければならない。例えば、ヨハン・ヘールマンやフィリップ・ニコライなど普通の（ことに日本における）ドイツ近現代文学の史的記述では扱われない宗教詩人の讃美歌や、説教講話なども俎上に載せ、所謂文学作品と同列において、その意義を追求する必要がある。また文学作品についても、詩人と作品の全体像を獲得するためには、著作の他に、その当時の作品出版の背景をなす諸事情の記録などを参照する必要がある。教会記録や、宗教論争のちらし、さらには民謡や説話、説教や民間信仰の伝承など、より広い地平のもとにそれぞれの時代の文献や作品の布置を定めていくことが求められた。それらが稀覯本としてのみ存在する現状では出張調査が不可欠であったので、各年度の夏期休暇中に、ベルンハルト・ガイェック教授との久しい交友関係によって支援が期待できるレーゲンスブルク大学の図書館を中心に、資料収集にあたった。

(2) これら収集された資料の読解にあたっては、上述のように知識社会学の方法を援用した。現実を客観的なものと主観的なものとの交錯とする知識社会学は、宗教的言辞の支配的な社会であれ、世俗化を深めていく中で宗教的言説とその批判が錯綜する状況下であれ、自己を形成していく主体のあり方を跡づけるために有効な視点を提供した。しかし、社会学研究ではないので、本研究はあくまでも修辞と文体を手がかりとし、「詩的人称」

を多様なあり方を追求していった。まずは、古典古代の修辞学以来の、論争や批評の二人称性を系譜的に秩序付けたうえで、そこからさらに、宗教社会における「二人称的」な言辞がドイツ近代文学の形成にどのように与り、さらにどのような展開を見せたかを跡づけた。その上で、現代へと時代が降るにつれますます顕著となる「詩的(文学的)主体」の「一人称的」言辞に注目し、その現実に関わる仕方を闡明しようとした。その際に、「語り手」に注目する近年の物語論、とりわけ抒情詩についての「詩的 私 Lyrisches Ich」論を援用しつつ、「詩的人称」の発現における「詩的主体の形成」の問題を捉え直した。多様な「一人称」の発現のなかで、主的主体の強度やその修辞的密度に注目することにより、傑出した主体形成としての詩人、作家の存立を問い直していった。

### 4. 研究成果

(1) 知識社会学によれば、社会は客観的現実として存在すると同時に主観的現実としても存在する。現実は、(自己の)外化、客観化、(社会の)内在化、という3つの契機からなる不断の弁証法的過程として捉えられる。そのような過程を経て個人はアイデンティティを確立していく。本研究は、16世紀宗教改革を経て福音主義教会が形成されていき、またその確立を経たのちに、やがて宗教が世俗化の波に晒されるといふ、大きなうねりの中でドイツ近現代文学の変遷を対象とする。その動態のなかで、個人は言説の主体として様々な姿で自己を形成していく。この自己形成の様態はその都度、その言辞に現れるが、宗教や伝統に対する態度は、保持か批判か、多様である。しかし、そのいずれであっても、詩的(文学的)主体が伝統の宗教的形象や修辞に関係する度合い・密度において、自己形成の強度もまた計ることができる。本研究はドイツ近現代文学の変遷を「聖書詩学」の系譜として記述することを志向するが、その際に、宗教に対する(表面的な)態度の表明如何よりも、この強度こそが重要なファクターであり、そのような強い「主体形成」の系譜に着目することを最初に見定めた。

(2) そのような立場を確認しつつ、本研究はまず共同体と個人の闘ぎ合いの原点から、両者の関係を歴史的に遡って検証した。手始めに、万葉初期の時代に共同体意識とその祭祀から「詩の自覚」が生じたという示唆(山本健吉『詩の自覚の歴史』)を導き、これをヨーロッパ文学の淵源に遡って確認した。ギリシア文学において叙事詩から抒情詩が生まれる経緯、またヘブライの宗教共同体にお

いてその共通認識に拮抗する形で預言者の言葉が詩的に凝集する経緯をたどった。さらに、宗教改革期における、ルターの内面的変革からその讚美歌創作へ展開する過程を跡づけた(雑誌論文 参照)。「命が死に勝つ」という伝統の修辞の枠を踏み越えるルターという言葉の強さ(「死が死を呑み込む」)は、その負荷ゆえにかえって伝統の言葉を質的に深める役を果たした。これは、共感の枠そのものを拡大し、ドイツ・コラールという新たな文学類型の誕生を導き、その発展の駆力となって次代に「詩的主体」の自覚と活動を導くに至る、その経過を明らかにした。

(3) 本研究の関心は、個々の予型・比喩形象の言語内在的な変遷であり、形象が埋め込まれた文献のジャンルの区別はさほど問題ではない。そこで「詩的主体」の形成を系譜的に辿ることは、詩人や作家に注目する所謂文学研究とは別な途を辿る。本研究は、ルターに続いて韻文・詩の展開を追い、コラールの展開を跡づけた。ルターの同時代人、J・ヨナス、N・デーツイウス、M・シャリング、また16世紀末から17世紀初頭に活動したPh・ニコライ、V・ヘルベルガー、J・フランク他の人々に注目し、現代の初めまで跡づけた。具体例をあげれば、日本では遺した一篇の讚美歌のみ知られる牧師ヘルベルガーをその大部な模範説教集の文脈から検討し、またバッハのモテットに作曲されたフランクの詩の背景となる共同体やその時代意識との関係を検討する(雑誌論文 参照) 等々の研究を行った。ルターという言葉は「呼びかけ」の二人称と、「語り」の三人称表現を典型とするが、いずれも「我々」という複数一人称を基底として持つ。これがフランクや、さらにP・ゲルハルト他の三十年戦争の世代になると、単数一人称「我」が支配的となる。この傾向は「敬虔主義」「啓蒙主義」を経て現代へと増大してゆくが、こうした動向を哲学・精神史や社会史の視点から闡明した(雑誌論文 参照)。こうした「主観性」へと向かう時代の傾きと、人間が「客観性」から疎外されてゆく状況を、近現代全般を規定する気分・地平と捉え、これに対する詩人の自覚と、その反映としての作品の成立経過を基礎づけていった(雑誌論文 参照)。このようにして「聖書詩学の系譜」前半の記述を方向づけた。

(4) 次に「主観性の文学」としての現代の文学理論に目を向けた。「語り手」の多様性を秩序づけたF・シュタンツェルの物語論や、「詩的一人称」の多様性を秩序づけたB・ゾルク他の「詩的 私 Lyrisches Ich」論などを検討しつつ、「詩的人称」の発現における「詩的主体の形成」の問題を捉え直した。

「詩的 私」の術語には、最初に注目を惹いたG・ベンの「絶対的自我」から、さらに自然抒情詩の自然対峙者、自己内の他者としての魂、等々に至るまで、様々な様相が帰される。それらの「詩的 私」は、現代における主観性の蔓延と関連しつつ、一方で自己喪失の危機意識やその同一性探求(=「神義論」)の願望を担わされている(K・スピナー『詩的「私」の構造』)。その多様な姿を、ゲーテの自然抒情詩から、次世代の「魔術的自己」、表現主義の「芸術至上」、自己崩壊の時代の「他者」願望(ツェラン)と辿った。現代文学の文体において一人称と三人称の蔓延する中で、「詩的主体」における二人称発語の意義を再確認した(雑誌論文 参照)。これは「聖書詩学の系譜」後半の叙述を予め概括する作業であった。

(5) ドイツ近現代文学を「聖書詩学」の系譜として捉える営みの成果は、毎年、資料主集のために訪れたレーゲンスブルク大学でドイツ近現代文学専攻のベルンハルト・ガイェック教授との意見交換の際に報告してきたが、着眼と手法の斬新さにおいてドイツでも顧みられるべきものと高く評価された。国際ハーマン学会のJ・リュブケ教授(ヴッパータール大学)との会談においても、同様な評価を得ている。また毎年の成果は、学部・大学院の授業において「宗教詩から世俗詩へ」という表題で講義された。さらに成果の一部はすでに私のホームページ上にも発表されている(「その他」ホームページ等、参照)。残されている課題は、「詩的主体」による「呼びかけ」と「語り」という二人称的発話形式のうち後者について、散文文献の検討をも含むより広い視角から「聖書詩学」が俯瞰することである。現在はこの作業に従事し、「聖書詩学の系譜」を書物として叙述する作業を行っている。その記述は、詩的(文学的)主体の生成を修辞の観点から見直す観点と手法において、ドイツ文学史研究に新たな貢献を加えるものとなるはずである。

(6) こうした作業の途上で、明治維新以来、ヨーロッパ思想・文学を受容してきた日本の文学・思想の状況を捉える際にも、同じ枠組み・方法を適用することの有効性を確認した。上の営みと併行して、内村鑑三、宮沢賢治、矢内原忠雄、他の人々についての研究成果をいくつか公にした(雑誌論文、また 他参照)。矢内原忠雄に関しては、最終的にその生涯と著作活動を書物の形に著した(図書 参照)。この経験は「聖書詩学の系譜」を叙述する際にも役立てることができる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 23 件)

川中子義勝、「二人称の詩学」、『詩界』263号、査読無、2016、13-20。

川中子義勝、「矢内原忠雄の詩」、『E R A』第3次6号、査読無、2016、40-48。

川中子義勝、「矢内原忠雄 歿後50年を経て改めて読み直す(5)」、『キリスト教文化』第6巻、2015年秋号、査読無、2015、231-247。

川中子義勝、「啓蒙の啓蒙 ハーマンのカント批判」、『思想』1097巻、査読有、2015、2-6。

川中子義勝、「秋谷豊の『神』」、『E R A』第3次4号、査読無、2015、38-41。

川中子義勝、「バッハのモテット『イエスよ、わが喜び』」、『ASPEKT』別巻、査読有、2015、93-98。

川中子義勝、「矢内原忠雄 歿後50年を経て改めて読み直す(4)」、『キリスト教文化』第5巻、2015年春号、査読無、2015、203-220。

川中子義勝、「矢内原忠雄 歿後50年を経て改めて読み直す(3)」、『キリスト教文化』第4巻、2014年秋号、査読無、2014、131-150。

川中子義勝、「抒情詩の中の『私』」、『E R A』第3次3号、査読無、2014、33-41。

川中子義勝、「矢内原忠雄 歿後50年を経て改めて読み直す(2)」、『キリスト教文化』第3巻、2014年春号、査読無、2014、204-219。

川中子義勝、「メシアの秘密」、『詩と思想』328号、査読無、2014、24-25。

川中子義勝、「バッハにおける死生と音楽モテット『イエスよ、わが喜び』BWV227」、『E R A』第3次2号、査読無、2013、36-43。

川中子義勝、「矢内原忠雄 歿後50年を経て改めて読み直す(1)」、『キリスト教文化』第2巻、2013年秋号、査読無、2013、155-171。

川中子義勝、「詩の自覚の歴史」、『E R A』第3次1号、査読無、2013、36-43。

川中子義勝、「エレメントとしての光・言葉」、『白亜紀』139号、査読無、2013、24-25。

川中子義勝、「内村鑑三『地理学考』考 嶋田洋一郎『ヘルダーとナショナリズム再考』を契機に」、『ヘルダー研究』第17号、査読有、2012、11-23。

川中子義勝、「新しい歌 ヨハン・ゼバスティアン・バッハにおける」、『同時代』第3次33号、査読無、2012、78-84。

川中子義勝、「聖書を主題とするドイツ詩」、『E R A』第2次9号、査読無、2012、61-65。

川中子義勝、「『問い』と『呼びかけ』(2)」、『E R A』第2次9号、査読無、2012、94-101。

川中子義勝、「『問い』と『呼びかけ』(1)」、『E R A』第2次8号、査読無、2012、107-115。

〔学会発表〕(計 2 件)

川中子義勝、「矢内原忠雄の生涯と活動」、『金沢中央教会創立60周年記念講演会(招待講演)』2012.11.3-11.4、金沢中央教会(石川県・金沢市)。

川中子義勝、「詩の自覚の歴史」、『日本詩人クラブ例会講演』2012.7.13、東京大学駒場キャンパス内ファカルティハウス・セミナールーム(東京都・目黒区)。

〔図書〕(計 2 件)

川中子義勝、『悲哀の人・矢内原忠雄』、かんよう出版、2016、198。

川中子義勝、他34名、『ドイツ文化55のキーワード』、ミネルヴァ書房、2015、275(「キリスト教 生活・社会・文化の基盤」24-27)。

〔その他〕  
ホームページ  
<http://www004.upp.so-net.ne.jp/kawanago/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川中子 義勝 (KAWANAGO, Yoshikatsu)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号：60145274